

生きる、生かす

大 森 常三郎

秋も深まる頃、マスコミは競って各地の「白鳥の渡り」を報道してくれる。猪苗代湖の場合も毎日、未だか、未だか？と電話のベルが鳴る。

しかし、私の心中は穏やかではない。それは、昨年（1984）全国を襲った干魃は県下を脅やかしたが、高原台地にある猪苗代湖は絶好の水タンクとして狙われ、遂に建設省は取水量の増加（湖面低下）を認めるに至った。

それが秋になっても回復せず、湖面の低下は2mを超えていた。

これは、白鳥にとっては自然の餌場は干涸化し、水生植物は枯死してしまい受難の年となったのである。

また、給餌作業を3年前より私に替って、続けてくれたS氏が健康を損ない辞退を申入れてきた。ついで酷寒期の人工給餌のための餌付場の凍結防止施設（地下水利用）を町当局に検討してもらっていたが、工費が意外に嵩むとのことで実現不能となった。

これまで町当局は、従前より白鳥は観光風物として考えていないことを表明していることもあり、八方塞がりならぬ四方塞がりの状態となったが、1982年日本白鳥の会伊豆沼研修会の折、迫町の町長さんの御挨拶の中で、「白鳥の保護」は観光、情操教育の場と組合せることによって永続性が保たれる!!とおっしゃられたことが脳裡に焼きつけられていたこともあり、ここで思いきって白鳥浜での給餌をやめて「港湾地域」との故をもって除外されていた、長浜に移動せしめる決心をした。

ここ長浜には酷寒期になると少数ながら、給餌を受けていた群が漸次増えていた。このことは昨年天皇陛下の御招待により赤坂御苑での園遊会に伺候した際賜わった御言葉の褒えの中に含めて申し上げた。

従前、白鳥浜に寄っていた白鳥群は給餌されないので水田に上り、落穂、藁等を拾い飢を凌いでいた。積雪と共に長浜の給餌を増やしたので、嬉々としてあげる鳴き声は呼び声となり年末には殆んど集結したのである。この辺一帯は、北岸唯一の不凍開水面である。

また、1984年、環境庁の磐梯朝日国立公園磐梯吾妻猪苗代地域管理計画の策定にあたり、検討委員として参画していたので、この北岸一帯を「水鳥の生息環境の保護に配慮する」の一項を明示して貰うことにより永久性が保たれることになった。

これで今迄の苦悩が一転してパラダイスに変貌することができた。これに伴ない冬季は炬燵檣の番人となっていた業者は、白鳥を守る会によって餌を確保補給されるので、容易に軒先きで給餌を続けられ、例年見られたヤセハクチョウは姿を消し、白鳥を観に訪ずれる人も多く楽しんでいる。忌むしいことながら昨年発生した30数羽の「餓死」という病名で斃した汚名は、返上することができた。

将来とも酷寒、積雪期にはここで越冬させることにする。やがて次季には、多勢の幼鳥を連れて来るであろう。